# エリッヒ・フロムの愛の概念に関する若干の考察

鈴木有郷

近代社会において愛という言葉ほど頻繁に使われているにもかかわらず，漠然とした意味しか持たない言葉もめずらしい。このような状態のなかで，エリッヒ・フロムは彼の著述を通して，愛とは何かという問題を30年以上にわたって精力的に追求して来た。彼の愛に関する意見は，その立場に賛成するしないにかかわらず，それにふれる者の愛についての考えを何らかの形で深めるものを持っているといえよう。

この論文は，フロムの愛の思想が提起するいろいろな問題を考察し批判することにより，愛とは何かという問題の核心へ少しでも近ずこうという試みの一つとなろうとするものである。

## Ⅰ．フロムの愛の概念

### 1．実存の問題に対する唯一つの解答

フロムによれば，人間は自然のなかの存在であると同時に自然を超越する存在でもある。自然のなかの存在としての人間とは，「その身体や生理的な機能に関するかぎり，動物界に属している」[2]という客観的事実を意味する。そして，「どんなに大きな進歩が動物界に起っても，動物の存在のある種の基本的諸要素はいぜんとして変らない。」[2]「ある種の基本的諸要素」とは具体的に何を意味するかをフロムは必らずしも明確にしているとはいえないが，少なくとも次の二点を含むものであることは明らかである。第一は，人間は動物と同じように，自然の法則の恩恵を受けなければ生きていけない存在であるということである。いかに知識の発達した人間も，空気や水がなければ一日たりとも生きていけない。人間も動物と同じように，自然の法則によって生かしてもらっているのである。第二は，人間は他の動物と同じように死ななければならない存在であるということである。人間は死を意識するが，死の現実の前には無力な存在でしかない。「われわれは生に関する限り敗北する他ないのである。」[3]

しかし，人間は自然に頼ると同時に自然を超越する。人間のみが自我の意識，

理性，想像能力の三つの要素を持っている。[4] 人間はその三つの要素を駆使して自然を彼自身の利益となるように利用することができるのである。又人間のみが生きる目的とは何か，充実した生活とは何かといった実存的疑問を自己に投げかけ，それに対して暗中模索するのである。人間は死に対して無力であるが，他の動物とちがって，死の意味を考え，それを現実の生活態度に反映させることはできるのである。

このように人間は半ば有限であり，半ば無限な存在である。それをフロムは人間の「二分性」という言葉で定義する。[5] この「二分性」のために人間は「宇宙の例外者」であり「変り種」なのである。[6]

自然をすてはしないけれど，又同時にそこに安住出来ない人間にとって，どうしても解決されなければならない，彼のみに課された一つの大きな問題がある。それは，人間はいかにしたら自己を失うことなく，他人と和合することができるであろうかということである。人は個としての人間であるということによってすでに他人から分離した存在である。しかし，一人の人間がこの世に生きていくということは，他人との間に存在する分離をいかに克服するかを模索するに等しい。フロムによれば，分離の克服の努力に実を結ばせるものが愛である。[7] 愛が「人間の実存の問題の解答」である理由がここにある。

愛は自己を失なうことなく他人と和合することであるが，それは「二人の人はひとつになり，しかもふたつにとどまる」ことを意味するのである。[8] この一見矛盾したことを一口にいえば，それは自分自身を他人に与えるということである。自分のなかに存在する喜び，悲しみ，知識，興味，理解，ユーモアといった「自分のなかに生きているものを与える」[9] ことに他ならない。

このような人間の相互関係には，他人を支配するとか，あるいはその反対に，自己を殺して他人にへつらうとかいったサド＝マゾキスティックな関係は存在しない。なぜなら，真の愛とはその対象いかんによって変化するものではないからである。愛はその対象となる人の社会的地位とか，能力とかいった表面的なものによって影響されることはまったくない。愛の対象が人であるということだけで十分なのである。つまり，愛とはすべての人間に対する愛，即ち兄弟愛或いは人類愛そのものなのである。愛は「人間の測りがたい神秘」である「存在の深み」[10] としての「すべての人びとに共通な人間の中核をなす同一性」[11] に基礎ずけられた人間の相互関係なのである。

そこには排他性の入り込む余地はない。「兄弟愛のなかにこそわれわれはすべての人との結合，人間の団結と一致を経験する」[12] のであり，それは又「同輩

の間の愛」[13]を意味するからである。このような同等な人間の相互関係においては，愛を与える人が生きる喜びを感じるのは勿論であるが，一方愛を受ける人も単なる受身の立場にあるのではなく，与えられた愛を彼自身の生活態度に反映することにより，相手を愛し返すのである。即ち二人は互いに貢献しあうのである。そして，このような人間関係のみが二人の人が一つになり，又同時に二つにとどまるという分離の根本的克服を意味するのである。そこにおのずと生まれる喜びが，生活の意味だけの根拠となるものである。この意味において，愛は人間の実存の問題の解答である。

> 与えることにおいて，彼は相手の生命になにものかを必然的にもたらす。そして，自分以外の人の生命にもたらされたこのものは，また彼に戻ってくる。他の人に与えることは，またその相手を，与える人とし，そしてこの二人の者は，生命にもたらしたものの喜びを共にすることになるということを意味している。与える行為において，なにものかがあらたに生まれ，そしてその中に包まれるふたりは，彼らの間に生まれ出た生命に対して感謝するのである。[14]

以上がフロムの愛の概要であるが，ここでわれわれは，その中核となる一つの要素に注意をはらわなければならない。即ち，一人の人間を愛することはすべての人間を愛することであり，自己を愛することは他の人を愛することと同じであるという考えである。自分自身を愛することの出来る人間のみが他の人を愛することができるのであるという自己愛イコール隣人愛の論理がここにはっきりと押し出されている。

> 自分自身を愛することはやはり徳でなければならず，不徳であってはならないはずである。……バイブルにいわれている《汝自身の如く隣人を愛せよ》というのは，人間の，自分自身の統合性と特異性に対する尊敬，自分自身を愛し，理解することは他の個人を尊敬し，愛し，理解することから分離させることができないということを意味しているのである。[15]

ではどうして自己愛と隣人愛の同格化が可能なのであろうか。それは，自己愛と利己心ははっきり区別されると考えられるからである。フロムによれば，利己心は自己愛の欠如である。「利己的な人が他者を愛することができないというのはほんとうであるが，実は，自分達それ自身をも愛することができない」のである。[16]すべての人間の同一性に基礎ずけられた愛（兄弟愛）を持たない人は，何ものをも（自分すら）愛することができなくなってしまう。兄弟愛こそ他の様々な形態としての愛，例えば，母性愛，エロチックな愛，自己愛，

親子間の愛，を根本から支える土台である。兄弟愛のないところに他の愛の形態は存在しない。「すべての形の愛の根本にあるもっとも基本的な種類の愛は兄弟愛である。」[17] しかし，又同時に，自己を愛することを知らない人は，兄弟愛が何かを理解することができないということも事実である。兄弟愛は自己愛が他の人に向って発展したものにはかならないからである。

2，疎外と愛の崩壊

近代社会が抱えているさまざまな問題は，愛の崩壊にその根本原因があるとフロムは考える。愛なき社会には，人間間の分離のみが存在し，分離を克服する人間の再合一（reunion）は存在しない。再合一できない分離こそがわれわれの生活を根本から蝕ばむ病根であるとフロムは指適するのである。再合一なき分離が疎外という形をとって近代社会にあらわれるのである。

> 疎外とは，人間じしんを例外者（alien）として経験する経験様式を意味する。人間が自分じしんから遠ざかってしまったことだといっていい。人間は自分じしんを，世界の中心だとか自分の行為の創造者として経験するのではなくて，かれの行為と，その結果が主人公となり，人間はこれに服従するか，それを崇拝しかねないことになる。疎外された人間は，他人とだけとも直接ふれあわないのみでなく，自分じしんともふれあうことがない。[18]

疎外された人間は，生きるために自分以外の力に身を委ねることによって自己を喪失するか（マソキズム），或いは他人を支配することによって自己を誇示するか（サディズム）のどちらかの方法をとる。それは，人間が自分自身のなかに人間としての力や豊かさを感じなくなった時，必然的に非人間化するということを意味する。何故ならば，彼は人間たることをやめ，物体化してしまうからである。人間の物体化——これこそ疎外そのものである。いってみれば，人間を蝕ばむ疎外は，人間が自己を愛することができないということにその根本原因を持っているのである。

3．疎外の形態

フロムは，愛の崩壊から生ずる疎外の形態を近代社会におけるさまざまな人間関係のなかに発見する。彼の意味する疎外形態を人間の心理に起る内面的徴候と人間の生活様式にあらわれる外面的徴候との二つに分類することができるであろう。

内面的徴候の第一にあげられるものが不安である。精神的にどんな不健康な状態のなかにあっても，自分は本来そうあるべきではないという認識を完全に

消滅させることは人間にとって不可能である。現在自分は自分自身に潜在する可能性を十分に発展させていないということに気がついた時，人間は今までの生活に疑問を抱かざるを得ない。そして，その疑問は自己を根本からゆるがすものである故に，実存的不安（anxiety）として経験されるのである。[19] 実存的不安は，自己の責任性を鋭くあばくことにより，罪という概念を通して認識される。[20] 不安と罪の感覚にさいなまれる人間は，自分を不幸な存在であると感じる。そして，幸福を求めて必死にあがくのである。

疎外の内面的徴候が不安と罪の意識と不幸であるとすれば，外面的徴候としての疎外は偶像崇拝（idolatry）である。偶像崇拝とは，フロムによれば，サド・マソキズム的態度そのものである。近代社会において，それは特に一人一人の人間が社会によって自動人間（automaton）となることを要求されているという事実にあらわれている。そこには人間の個性は存在しない。「社会的機構に順応している人間」にわれわれは知らず知らずのうちにならされてしまっているのである。だから，われわれは日常の生活の場において，相手に自分がどう受け取られているだろうかということにのみ関心を抱く。そのような人間にとって，結婚は「心のなかに入り込んだ関係」を欠いた，単なる「円滑な働きをするチーム」[22] でしかないし，夫婦間の愛情は「性的満足が適当に得られている」[23] だけのことになってしまう。そこには，相手を信頼し，相手から信頼される喜こびはない。親子関係は，往々にして子が自分の考えや興味や関心を抑圧して，親の考えに盲従することによって親に受け入れてもらおうとする態度と，親は親で自分の考えや興味を子に押しつけることが子を愛することであるという誤った考えの上にたったエゴイスティックな関係に陥ってしまう。このような個性の消滅が個人的関係のみならず，政治，経済，文化といった人間生活のすべての分野にわたって浸透しているという事実に現代社会にはびこる疎外の破壊性の根の深さを見ることができるのである。

4. 愛の回復

愛の崩壊がいかにわれわれの生活に破壊的な影響をもたらすかという点に焦点を当ててフロムの思想を考察して来たが，それではここで愛はいかにしたら回復されるのかという問題にふれる必要がある。

愛の回復に関するフロムの論理全体をつらぬいている信念がある。それは，人間がその気になりさえすれば，愛を生活の基盤とする「正気な社会」の成立は遠からず実現されるであろうという楽観論である。フロムの著述の目的は，その論理の合理性と実現のための具体的方法を証明し又吟味することであると

いってもいい過ぎではない。

愛の回復のための具体的方法は，個としての人間を内面的，心理的な面から変革することと，人間を物体化してしまう近代社会の精神構造と機能を「正気な社会」のそれへと変化させていくという二つの焦点にしぼることができよう。[24] 人間の内面的変革は，愛の実践のための訓練と鍛練によって可能である。[25] そして，そのような訓練や鍛練は，禅にみられるような黙想を通して得られる精神統一や忍耐と，愛を自分の生活の究極的関心事にする意志力の創造を目的とする。[26] その結果，人間は愛するための必須条件である理性と客観的思考能力と他の人に対する謙遜の態度を身につけることができるのである。

しかし，人間は他人から隔離された存在ではなく，他人との交りのなかで生長していく社会的存在であるからして，愛のための訓練は，それを可能にせしめる社会的環境と機構があって初めて達成されるのである。「体制が人間の幸福と成長の目的に奉仕するように体制を人間化すること」[26] が必要なのである。フロムによれば，体制の変革は少なくとも経済，文化，政治という三つの分野において同時になされなければならない。それをくわしく考察することはここでは不可能であるが，その骨子は次のように要約できる。経済的変化は近代資本主義経済を一人一人の労働者が積極的で，責任性を持った参加者となることをゆるす「共同主義的社会主義」[27] へと変革していくことにより，文化的変化は教育，儀礼，宗教の三つの要素が人間の可能性の創造的発展の源となることにより，そして政治的変化は多数意見が少数意見を圧迫，あるいは無視するのではなく，少数意見が提起する問題を徹底的に論じ得る民主主義を生み出すことによって確立できるとフロムは考えるのである。[28]

## Ⅱ．愛の概念の前提

以上われわれは，フロムの愛の意味，その崩壊と回復について考察して来たが，ここで，彼の愛の思想全体の裏にひそむ二，三の前提となるものを解明する必要がある。

### 1．ヒューマニズムとナチュラリズム

フロムの愛の概念は，ヒューマニズムとナチュラリズムという一見相反する思想をその基盤に持っている。彼の思想がヒューマニズムであることに異論をとなえる人はいないであろう。彼は彼自身の立場を次のように定義している。「人道主義的立場とは，人間存在よりよい高次のものはなく，人間存在より尊厳なものはないという立場である。」[29] 即ち，善と悪，徳と罪の基準は人間自身

が決めるものであり，「絶対的なる神」の概念にみられるような，人間を超越する力によるのではない。人間はまことに『万物の尺度』なのである。[30]」これは，ヒューマニズム的人間観の最も端的な表現とみてよいであろう。

しかし，ここで問題なのは，フロムのヒューマニズムはあくまでも自然主義をその基礎に置いているという事実である。それは次のように説明できるであろう。彼によれば，「人生の目標は人間の本性にはたらく法則にしたがってその力を展開することであると理解されるべきである。[31]」つまり，人間は自然から与えられた「諸欲求[32]」の内容をくわしく吟味し，それを自然の法則通りに満たしていくことなのである。

フロムの思想にひそむ矛盾がここにあるとわれわれは考える。即ち，善と悪，徳と罪の基準は，フロムが最初に示したように人間の理性や客観的思考能力によって創りあげられるものではなく，むしろその反対に，自然のなかにそれを発見するのであるという，彼のもう一つの論理が浮びあがってくるのである。「まったく偶然に，この世界に投げこまれた[33]」人間の究極的目的は自然から与えられているということが意味するものは，愛するということの根拠も又同じように自然にあるということでなければならないであろう。

人間の創造的可能性の発展を考察する時のフロムはヒューマニストであるが，その創造性の根拠を深く解明しようとする時のフロムは，ナチュラリストであるといえよう。このように考えると，彼の愛の概念にはヒューマニズムとナチュラリズムという二つの異なった思想が，その相違を認識されることなしに共存しているといえるのではないだろうか。少なくとも，フロム自身この問題をあえて意識して論理を進めているとは思えない。

2. 性善説

フロムの愛の概念の前提の第二として，本来の人間は善であり，悪ではなく，創造的ではあるが破壊的ではないという信念をあげるべきであろう。そして，その信念は人間に内在する無意識的なものは（the unconscious），それ自体において現実そのもの（reality）であり，真実なもの（the true）と直結しているという彼の認識論によって強く表面に押し出されるのである。「無意識的なものを意識しうる人の意識を拡大するということは現実に触れるということであり，またこの意味で真実（知的にも情緒的にも）に触れるということを意味する。[34]」無意識を意識した状態の具体的な例をフロムは禅の悟りに見出すのであるが，[35] これは，人間は自分自身のなかに人生に必要な真実のすべてを所有しているという彼のヒューマニズムの思想をもっとも端的にあらわしたものとみて

よいであろう。（この点を彼は一貫して貫いていないことは前に述べた。）この論理に従えば，人間は自分のなかにある真実や現実に目を向けることによってのみ愛することができるのであるということになる。愛することはセンチメンタルな安易なものではないが，訓練や鍛練を受ける意志と情熱のある人にとって，必らず可能なのであるとフロムはいうのである。

フロムは人間の可能性を第一義的なものと第二義的なものに区別する。人間の創造的可能性は「第一義的」であり，その反面破壊的可能性は「第二義的」であるとされる。[38] 創造的可能性が第一義的であるということは，適当な条件のもとでは，必らず実現されるものであることを意味する。又破壊的可能性が第二義的であるということは，第一義的な創造的可能性が何らかの形で抑圧された時にのみ必然的に生じてくる現象であるということである。[37] フロムはさらにいう。「一方が強まれば，それだけ他が弱まり，そして，その逆も又同様である。」[39] つまり，創造的可能性が強まれば強まるだけ，破壊的可能性は弱まっていくというのである。愛する能力を持つ人は，その能力を発展させることによってそれと反比例して憎むことができなくなるのである。フロム流の心理学的考察が客観性を持ち得るものかどうかは大いに問題のあるところであるが，人間の性質の根本的善を信じ，それを証明することが彼にとっていかに重要であるかということを示すものであることは確かである。

人間の本来の善的性質をより具体的に証明しうるものが，「外部からの制裁や褒賞から独立した」，「すべての人間のうちに存在する」人間自身の声としての良心であるとフロムは考える。[39]

> 良心とは，われわれ自身に対するわれわれ自身の反作用である。それは，われわれの真の自己の声であり，われわれをわれわれ自身によび戻し，生産的に生かしめ，そして十全に調和的に発展させる声，――すなわち，われわれのうちに潜勢的に在るところのものを実現させる声である。それはわれわれの真のすがたの守護者である。それは「人が自己について抱くべき正しい誇りを守り，同時に自らの自己に対して然りと言う能力である。」[40]

愛するということは，良心に従って行動するということとまったく同じである。それでは良心の声を聞くために，われわれが必要とするものは何であろうか。それは良心に聞こうとする確固たる意志以外のなにものでもない。つまり，フロムによれば強い意志の持ち主にとって愛するということはそれ程むづかしいことではない。何故ならば，何をいかに愛するかということは良心がすべて

教えてくれるからである。

3, 罪の否定

人間の本来の性質が善であるというフロムの論理は罪の否定に直結する。人間の諸欲求が外的環境によって生産的に満たされないアブノーマルな状態においてのみ破壊性が生じるということは，いいかえれば，外的環境が変革されれば人間の破壊性は自然に消滅していくということでもある。「もし社会が人びとを有徳にしようとする関心を持つとすれば，社会は人間を生産的にするのでなければならない。したがって，また生産が発展するための諸条件を創り出そうとしなければならない。」[41] そして，「それの達成は単純でないにしても，決してそれほど労力を要する困難な仕事ではない。」[42] このような論理にとって，罪の意識は人間の可能性の抑圧であると理解されるのは当然であろう。それは「権威主義的経験の特徴」であり，「マソキズム的経験」[43] であるとフロムはいうのである。この考えが，本来善であり罪なき存在である人間は努力次第で相手を愛することができるのであるという愛の思想に帰結するものであることはいうまでもない。

Ⅲ．フロムの愛の概念の問題点

愛は人間の生活の基盤であるから，愛の不毛な社会に人間らしい生活はありえないというフロムの論理そのものは格別新らしいものではない。しかし，その論理を精神分析学という分野の観点からもう一度ねりなおし，それを駆使して近代社会を根本から問いなおそうとする彼の文明批評は圧倒的な洞察力を持ってわれわれにせまるものを持っている。われわれの社会において愛するということがいかに誤解されているか，そしてその誤解が社会をいかに非人間化させているかといったあたりの考察は，彼をしてリースマンやホワイト等の社会学者がともすれば陥りやすい現状肯定主義的性格を徹底的に否定する要因となっており，彼の思想の最も独創的な部分であるといっても過言ではないであろう。

しかし，近代社会と文化への辛辣な批判を支えているフロムの愛の概念そのものが人間性回復のための原動力となるかということになると問題は又別である。われわれはその問題の内容を次の三点に集約できると考える。

1. 個としての人間の消滅

フロムによれば，愛とは人が自己を失うことなく他と和合するということであった。自己を愛さない人間は他の人をも愛することができないという論理が

ここから提起されているということは前に述べた通りである。つまり，ここで彼がいおうとしていることは私という人間の自己と私の交りの対象である相手の自己が両方確立していてこそ愛という人間独特な相互関係が可能であるということであろう。

しかし残念なことには，個としての人間の存在を根本から支えるものはあるのか，そしてあるとすればそれは一体何かという原理的問題意識がフロムには欠如しているように思われるのである。前述したように，彼は人間の存在の神秘性を追求する道を禅に見出そうとするが，しかしそれでは個としての人間の独自性が「無」という普遍的理念のなかに消滅されてしまうのではないだろうか。禅以外で彼の愛の概念の根本原理となるものはヒューマニズムである。しかし，彼のヒューマニズムは自然主義に基礎づけられたヒューマニズムである。だが自然主義的ヒューマニズムは人間と他の動物との質的相違を明確にするすべを持たない。ましてや個としての人間が持つ独自性の基盤となることはできないであろう。

その具体的な例として神イコール人というフロムのフオイエルバッハ的発想をあげることができる。彼によれば神は人間を超越する絶対的存在ではなく，普遍的人間性そのものなのである。専制的な部族の主というもっともプリミティヴな段階から愛情深い父親の姿へと変遷をへた神概念は，近代にいたってやっと神は人なりという普遍的真理に到達したのである。神は普遍的なものであるから「けっして名前を持つことがない。」「名前は事物，人など，特定のなにものかを表わすものである」[44]からである。つまり，神イコール人間であるという時にフロムの意味するものは個としての人間を含まない。それは丁度一滴のインクがコップの水のなかに完全に消されてしまうように，フロムの愛における個としての人間は普遍的人間という抽象的概念のなかに抹殺されてしまう存在であるということができるであろう。

2. 疎外の深淵

近代社会において人間が疎外感をマヒさせようといかに努力しているかということを徹底的に分析しようとするところに社会思想家としてのフロムの洞察力の深さと鋭さを見ることができる。しかし，彼は人間の疎外の深淵をその底まで見つめた上で彼の理論を展開しているであろうかという問いかけをわれわれはここでする必要がある。

現代におけるわれの疎外は，果してフロムの意味する愛によって克服できる性質のものであろうか。この問いの答えいかんによって，彼の愛は人間の実存

の問題の解答となるものであるかどうかの判断が決定されるといってよい。

この問題を二つの観点から考察することができるであろう。第一の観点は理性であり第二のそれは自己愛と隣人愛の関係である。フロムによれば理性は人間の善的要素を引き出す媒介である。つまり，理性が発達した人間はそれと比例して徳も発達した人間であり，又それと反比例して不安や罪の意識や偶像崇拝といった疎外形態から解放された人間であることを意味する。しかし，このような理性の解釈は可能であろうか。人間は理性そのものを自己のために利用することのできる，理性を超越する存在であるということをもっと問題にすべきではないだろうか。理性が往々にして人間のコゴイズムの道具と化してしまうという事実は，理性イコール徳，理性イコール善というフロムの短絡な論理の展開をゆるさないのではないだろうか。同じことがフロムの自己愛即ち隣人愛という考えについてもいえる。人間の心理は神秘的複雑さをひめている。自己を愛するということが，そのまま隣人愛につながるという論理はあくまでも人間の現実から遊離した抽象論であるといわれても仕方がないのではないか。自己愛と自己憎悪をフロムがいうように区別できないというところに疎外の深さがあるということではないだろうか。人間は自然の限界を越え，理性の領域を越えると同じようにエゴイズムをも超越することができるのだろうかという問いがまったくなされていないということはどういうことなのだろうか。現実の生活の場における人間は，自己の利益のみを考えるエゴイズムから逃がれることはできない，という立場に対する確固とした反駁はフロムからは聞くことができない。彼はそのような立場を無視しているのである。エゴイズムが提起する問題を追究せずに，純粋な自己愛と隣人愛をいくら論じてもそれは説得力を持ち得ないであろう。この問題は，人間の可能性を第一義的なものと第二義的なものとに区別することによって解決される性質のものではないからである。フロムの愛が人間の実存の問題の解答でありえない理由は，彼の疎外の分析がコゴイズムの深淵をみきわめたうえでなされたものではないことにある。人間はエゴイズムを超越できるのかという問いを素通りした愛が，人間の生活を根本からたてなおす力を持ちえないことは当然といえるかもしれない。

3. 人間と動物の質的相違

フロムが愛するということをいう場合，それはかならず人間間の相互関係を意味する。人間は他の動物よりも質的に尊い存在であるからして愛することも可能なのである。フロムはすべての人間に共通した「中核としての同一性」とか「人間の存在の深み」とかいう言葉で人間と動物の質的相違を説明しよう

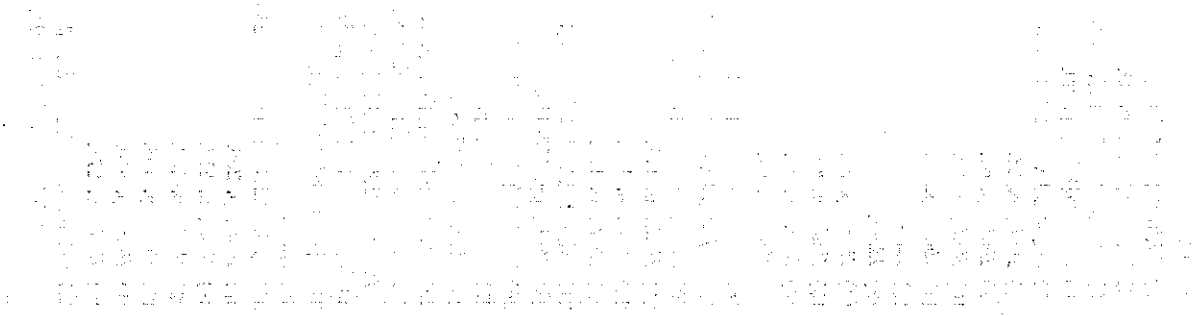
としているが，結局彼はその根拠を人間特有の諸欲求の供給源としての自然のなかに発見するということは前に述べた通りである。しかし，ここで彼は一つの大きな問題に直面しなければならない。即ち，もし人間性の質的相違の内容が人間が持つ能力や欲求にあるとすれば，そのような能力や欲求を持たない人間は果して真の意味で人間といえるのかという疑問である。例えば，理性を持たない人間は人間なのだろうか。理性の高い人は低い人よりもより尊い存在なのだろうか。精神薄弱者は動物と同じなのか。生死をさまよう意識不明の病人は植物とかわらないのであろうか。このような実存的な問いに対してフロムは何らの解答も与えていない。いいかえれば，彼は人間を人間たらしめる根本的な基盤を持たないということにほかならない。人間は尊い存在であるから愛し合わなければならないとフロムはいう。しかしどうして人間は愛し合わなければならないのかという問いに対する答えは，彼から聞くことができないのである。

## IV. 結　論

われわれはフロムの愛の内容を考察，批判してきた。そして最後にわれわれが直面せざるをえない問題は，人間は果してフロムがいうような具合に愛することへ自己変革することができるのだろうかという疑問である。彼は丁度貯水池の水がいっぱいになって外にあふれ出る状態になって初めて田畑がうるおされるように，自己を愛することによって初めて他人を愛することが可能であると考える。しかし自己愛が結局はエゴイズムの拡張につながってしまうところに人生の悲劇的性格があるということはできないだろうか。即ちフロムとは逆に，愛とは愛し得ない存在としての自己を徹底的に見つめていくことから初まるのだということはできないであろうか。

人間に真の愛が存在するとすれば，それは彼をして彼の内部にひそむエゴイズムと対決させ，しかも彼を絶望に陥し入れることなくそれを克服する創造力でなければならないであろう。フロムの愛の思想をのりこえうるものはエゴイズムを克服する力に基礎ずけられた愛の思想以外にはない。そのような力とは何かを問い続け，追い求めていくことが愛の問題を考えていく過程においてわれわれすべてに与えられた課題であるということができよう。

註

1)「正気の社会」(社会思想社)，p. 38.

2) *Idem.*
3)「人間における自由」(創元社), p. 64.
4)「正気の社会」, p. 39.
5)「人間における自由」, p. 63.
6)「正気の社会」, p. 39.
7)「愛するということ」(紀伊国屋書店), p. 9.
8) *Ibid.*, p. 28.
9) *Ibid.*, p. 64.
10) *Ibid.*, p. 39.
11) *Ibid.*, p. 64.
12) *Idem.*
13) *Idem.*
14) *Ibid.*, p. 33.
15) *Ibid.*, p. 80.
16) *Ibid.*, p. 83.
17) *Ibid.*, p. 64.
18)「正気の社会」, p. 142.
19)「愛するということ」, p. 11.
20)「正気な社会」, p. 233.
21) *Ibid.*, p. 119.
22) *Ibid.*, p. 122.
23) *Ibid.*, p. 124.
24)「愛するということ」, p. 152.
25) *Ibid.*, pp. 153-155.
26)「希望の革命」(紀伊国屋書店), p. 149.
27)「正気の社会」, p. 318.
28) *Ibid.*, pp. 311-392.
29)「人間における自由」, p. 39.
30) 人間における自由人間の諸欲求は五つに分類され, それぞれが「存在条件から生じた」ものであるとされる。詳細は「正気の社会」, pp. 44-86.
33)「人間における自由」, p. 62.
34)「禅と精神分析」(創元新社), p. 195.
35) *Idem.*
36)「人間における自由」, p. 256.
37) *Ibid.*, p. 258.
38) *Ibid.*, p. 258.
39) *Ibid.*, p. 192.
40) *Ibid.*, p. 193.
41) *Ibid.*, p. 270.
42) *Ibid.*, p. 271.
43)「自由からの逃走」(創元新社), p. 189.
44)「愛するということ」, p. 94.